



共同通信



2010年6月19日 166(376号)

日本基督教団 西宮公会月報 〒662-0834 西宮市南昭和町10-22
TEL0798-67-4691 FAX 0798-63-4044、Email : koudou@gamma.ocn.ne.jp
<http://koudou.jp/> 振替 01170-3-4901

時代にふり回されるのではない 自分の人生を語ってほしい、
あの時 心を躍らせて生きた 自分の人生を語ってほしい、
後悔に 身をふるわせたこともある 自分の人生を語ってほしい、
笑い 泣き 齒ざしりをした 自分の人生を語ってほしい、
今日 こんな決意をしたという 自分の人生を語ってほしい

To tell the story 66

『アイスホッケーと子どもたち』

妊娠半年で双子だと分かり、用心のために実家の豊岡に帰り出産することに決めました。お陰様で2000年3月、無事に男の子と女の子の双子が生まれました。生まれた子どもたちは小さかったので、元気で大きくなってほしいと願って、双子用のベビーカーを押してあちこちの公園や集まりに連れて出かけてました。1歳をすぎた頃からは毎日、雨の日も風の日も雪の日もかっぱを着て散歩に出かけていました。子どもたちは好奇心旺盛で、散歩の途中アリに興味を持ち立ち止まって観察したり、道端の草花で花束を作って遊んでいました。夏は海へ海水浴、冬は山へそり遊びをさせたりして野外活動に

興味を持つように家族一同それなりに努めました。

3歳になって幼稚園に入園させるにあたり、子どもがのびのびとさせてもらえるような幼稚園はないかと探していたところ、西宮の自宅の近くの公園で遊んでいた時、同じ年頃の子どもさんを遊ばせていたお母さんから、「西宮北口に面白い幼稚園があるよ！名前は忘れたんだけど・・・」と素足で走り回る二人を見ながら言われました。地図で調べて次の日に二人を連れて行ったのが共同幼稚園との初めての出会いでした。「こんな所に？」と思って門をくぐって中に入っていくと、園庭のいたる所におだんごを作った穴がたくさんありま

した。それを見て「ここなら・・・」と感じました。先生（順子先生）が出てこられて、いろいろと話を聞いているうちに、「楽しそう！！」と思いました。子どもたちは3歳まで豊岡で過ごしていましたが、公同幼稚園の入園が決まり西宮へ帰ってきました。入園した7月には、次男が生まれ毎日慌ただしく子育てに追われていました。

その翌年の冬に子どもを初めてアイススケート場に連れて行った時、アイスホッケーの監督さんから「ジュニアアイスホッケークラブがあるから、一度体験してみない？」と言われ、「体験なら・・・」と思い子どもに体験をさせたことがアイスホッケーに取組むきっかけでした。

子どもがアイスホッケーを習い始めて分かったことですが、アイスホッケーは、アメリカでは、四大スポーツの一つで、プロのチームが30くらいあり、とても人気が高いスポーツだそうです。一方、日本ではあまり知られていませんが、関西でも幾つかのチームがあり、子どもだけでなく、大人や女性のチームもあるそうです。

アイスホッケーとは、氷の上でスケートをしながら、先を曲げた棒（スティック）でパック（小さな円盤）を相手のゴールの中へ入れる競技で、一チームは、ゴールキーパーを含めて6人で行います。激しいスポーツなの

で、1試合45分に何度も選手交代をします。

小さい小学生でも、本気で体と体をぶつかりあって、パックを取り合っている、激しいスポーツです。この激しくぶつかりあって、パックを取り合うところが、子どもには、とても楽しいようです。

以前にこんなことがありました。ある試合の直前に相手チームの選手が、ほとんどみんな体が大きいから気を付けるようにと子どもに話したことがあります。それまで、試合に前向きだった息子が、プレー開始直前、急に「頭が痛い」と言い出し、様子がおかしいのに気づいたコーチに「休んでおけ！」と言われ、しばらくベンチで休むことになりました。試合中盤頃に、息子は自分からコーチに「もう、大丈夫なんで試合に出させて下さい」と申し出たのですが、「今日はおさない」と言われてしまいました。ハーフタイムの時、私はコーチに呼ばれ「本人はもう頭が痛くないと言ってますが、今日の試合には出しません」と言われ、結局息子はその試合に出場しませんでした。後で思ったのですが、コーチはその試合に、息子の体調が悪いから出さなかったのではなく、息子を見て彼の不安な様子を察して出場させなかったのだと思います。試合の前に、彼は親の言葉に敏感に反応し、私は彼のせっかくのやる気を失わせてしまったのです。

子どもの未熟さもあったと思いますが、子どもに寄り添って、そっと見守ることの難しさと親の責任を痛感した出来事でした。それからは、なるべく「楽しんでね！」と言って試合に送り出すように心がけています。

それから数年後、ある大会でこんなこともありました。決勝戦で同点になりPS戦(サッカーでいうPK戦)で、最後の一人に我が子が出してもらえました。結果は、シュートを決めることができずでしたが、後でコーチから聞くと「彼は、自信たっぷりの顔つきで、真っすぐ、僕を見ていました。『行くか』と聞くと『はい』と返事をしたので、最後の一人として彼を出しました」と言われました。コーチは本人のやる気を見逃さず、子どもの気持ちをしっかり読み取ってくださったのです。このことは、本人にとって、とても自信になったと思います。

幼稚園でも、先生方の声かけのタイミングがこれと同じだと思います。例えば、なわとびや甲山・六甲山の山登りにしても、子どもたち一人一人を日常よく観察していただき、その

時々適切な声かけをしてもらえるおかげで、子どもたちはのびのび過ごすことができ、また、彼らがいろいろなことに挑戦出来るのは、やはり先生方が本気で子どもたちと向き合ってくれているからだと思います。子どもたちを信じ、その子の力を引き出せる声かけは、本当にすごいと改めて思います。

幼稚園に、7年間、三人の子どもがお世話になりました。子どもを通園させる中で、多くの先生方やお友達との出会い、いろいろな体験や経験をさせてもらいました。そんな園生活の中で、いろいろなことに頑張っていける粘り強さを養っていただいたと思います。今後も、その出会いを大切に、親子共々成長していきたいと思っています。更に、親子の絆をいっそう深めて、お互いに自立して行けるように努力していきたいと思っています。

(押田 智子)

「過ぎし生と過ぎし日の時間を浪費した罪により、何とか詩人という名前一つを付けているが、これは私の選択というよりは世の中が私に課した無期囚の刑罰なのである

十八歳の時であれ、今であれ、私の北極星は詩である。だから、誰かが私を運命の詩人と言わざるをえない、と言う時にも私は詩人として終わらぬことを望む。言うなれば詩人の果てにある詩になりたい。詩人ではなく詩！

(高銀)

マタイ、マルコ、ルカなどの福音書の場合、十字架に“つけられた”イエスは、終始沈黙を守っています。(“つかまえられた”時も。)
「さて、イエスをつかまえた人たちは、大祭司カヤパのところまで連れて行った。・・・すると、大祭司が立ち上がり、イエスに言った。『何も答えないのか、これらの人々が、あなたに対して不利な証言を申し立てているが、どうなのか』・・・しかし、イエスは黙っていた。(マタイによる福音書 26 章 57 ~ 63 節)。その後、総督ピラトに「あなたがユダヤ人の王であるか」と尋ねられて「そのとおりである」と答え(同 27 章 11 節)、十字架で絶命する寸前に「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と言う以外、何かを語るということをしませんでした。

ヨハネによる福音書では、十字架につけられたイエスが、その十字架のそばにいた、イエスの母、弟子たちと言葉を交わします。「イエスの十字架のそばには、イエスの母と、母の姉妹と、クロパの妻マリヤと、マグダラのマリヤとが、たたずんでいた。イエスは、その母と愛弟子とがそばに

立っているのをごらんになって、母に言われた、『婦人よ、ごらんください。これはあなたの子です』。それからこの妻子に言われた『ごらんください。これはあなたの母です』。その時以来、この弟子はイエスの母を自分の家に引きとった」。

マタイによる福音書などの場合、とらえられて処刑されるイエスの“そば”には、母はもちろん、弟子たちも、だれひとり身近な人はいませんでした。つかまえられて処刑される“先生”の近くに、弟子たちが居なかったことを(逃げ去ったことを)、マタイによる福音書が書いたりするのは、とりあえずそれが“事実”だったからだと考えられます。イエスが何を理由に“つかまえられ”“処刑”されることになったのか、明確な理由は示されません。征服者として統治するピラト(ローマ総督)は、自分たちの目の及ぶ限り、イエスを処刑する理由はありませんでした。「彼らはいっせいに『十字架につけよ』と言った。しかし、ピラトは言った、『あの人は、いったい、どんな悪事をしたのか』」(マタイによる福音書 27 章 22 ~

23 節などには、書かれています)。ユダヤ教指導者は別で、痛いところを突かれ、事ある毎にイエスとの衝突を繰り返していました。ねらわれていた、と言えなくはないくらい、やり合っただけです。その結果、イエスは捕らえられ、処刑の判断を下すピラトの前へ連れ出された時、集まった群衆もそれを要求し、十字架での処刑が決まります。そんな経緯のそんな状況でしたから、中でも群衆の前で、イエスの仲間であることを名乗り出ること、認めることは容易ではなかったということなのです。マタイ福音書などは、そんな経緯をありのままに伝えています。「ペテロは『鶏が鳴く前に、三度わたしを知らないと言うであろう』と言われたイエスの言葉を思い出し、外に出て激しく泣いた」(26章75節)。この場合のペテロは“裏切った”と言えなくはありませんが、辛辣でかつ痛いところを突いて止まないイエスには、付き合いきれなかったというのが真実に近いかも知れません。

それなのに、ヨハネによる福音書は“十字架につけられた”イエスのその“イエスの十字架のそばに”、イエスの母とその姉妹たちが“たたずみ”、加えて愛弟子も“そばに立っていた”と書かれていて、更に、十字架の上から彼らに語りかけさえします。“婦人よ、ごらんなさい。これはあなたの子です。ごらんなさい。これはあなたの母です”と。十字架につけられ

る“理由”があるその人のすぐ近くに、“身内”であったり、“仲間”である人たちがながめるように居てしまうことは、どうであれ不自然です。しかし、ヨハネによる福音書は、そんな不自然を敢えて書き残します。どんな意図があって、それを敢えてするのか。

何かの理由があって、十字架につけられている真っ最中の人、それを見守っているらしい人に、語りかける、などということはあり得ないことです。しかし事実ではなく“物語”ということであれば、書けなくはありません。“なんでもあり”ということではなく、それでもって伝えたい何かがあって、その結果、それが示されるのであれば、問われるのは物語の“聞き手(ないしは読み手)”ということになります。たとえば、そんなこととして、ヨハネによる福音書が書いていることのひとつが、3章23節だったりします。「過越の祭の間、イエスがエルサレムに滞在しておられた時、多くの人々は、その行われたしを見て、イエスの名を信じた」。

今はそこには居ないイエス、“イエスの名を信じる”それが信じるに値することを、言葉を尽くして語りかけるのが、ヨハネによる福音書らしいのです。

(菅澤 邦明)

～今月のいのり～

神さま、メダカの水槽の中のオオカナダモが白い花をつけていたり、緑の葉の裏に小さな虫が集まっていたり、まだ青いカリンが落ちていたり、ささやかな自然に気づき、今ある場所に喜びを感じる日々をありがとうございます。

自然はいつも、私たちに恵みだけを与えてくれるわけではありません。人間の小ささを感じさせる自然災害や、心を寄せていた植物が、無残に食い荒らされてしまうこともあります。そんなとき、私たち人間は自分を苦しめる存在に向き合うことを恐れ、また愛することができなくなってしまう時があります。

しかし、神さま。あなたが全てを創られ、全てを愛されました。名前も知らないような小さな小さな花をあなたは慈しんで養ってくださいました。

どうか、私たちがその小さく、真実である愛を忘れることがありませんように。

子どもたちが、人より美しく、人より大きな花を咲かせることよりも、自分が愛されていることを知っている花のように生きられますように。

この小さなお祈りを主イエスキリストの御名によって、御前におさげいたします。アーメン

(大平 有紀)

“ きてきてきて～ アジサイのはなが～ ”

きてきてきて～ アジサイのはなが～ 幼稚園の園庭にあるくすのき広場には今、アジサイの花が見事に花を開かせています。子どもたちと散歩に出てもいろんなところでその姿を見つけることができるアジサイ。

6 ピンク、青、紫、赤、いろんな色があ

るのも面白く、つぼみの時はその存在にあまり気付かなかったのに、幼稚園の外で見つけたものも嬉しそうに報告してくれる子どもたちですそのアジサイを見に、くすのき広場へ行ってみると何人かのぼっぼぐみの子どもたちがしゃがみ込み、地面に

向かってじーっとしていました。もしかして～と思うとやっぱりです。子どもたちにとってはアイドルのような存在のダンゴムシがそこにいたのです。ツンツンと触ってみてはダンゴムシが丸まる様子を楽しんだり、そーっと捕まえては手のひらの上で動くその姿をとて愛おしそうに見つめているのです。そこへさんぽ・らったぐみや、年長ぐみの子どもたちも加わって、『なに～??ダンゴムシみてるんか?』『こっちにいっぱいおるで～』とすぐそばのみかんの木の下にいるのを教えてあげていたり、ほら!と捕まえて渡している姿があったり、ダンゴムシという存在を通して子どもたちの世界がどんどん広がり、繋がっているのです。自分たちより大きな先輩に先輩に話しかけられ少し緊張していたぼっぼぐみの子どもたちもダンゴムシに目を輝かせ、それはそれは嬉しそうなのです。園庭のいろんな場所でそんなふうに関係がさりげなく作られていくことが実はとても豊かであることに気付かされつつ、そんなふうに関係を作る手助けをしてしまうダンゴムシってすごい・・・!とも思ってしまうのです。

公同幼稚園の園庭にはいろんな木があります。冬には一旦すべての葉を落とし、また次の春には新しい芽を出し、今はその葉を青々と大きく茂らせています。子どもたちの遊ぶ

のにちょうどいい木陰を作ってくれる木々だったりもします。そんな木々の中でふと見上げたいちょうの木にはもうぎんなんがすずなりに実っています。何年か前には木が枯れかけて、次の年にはその元気な姿を見れるのか心配もされたいちょうの木でしたが、その次の年もなんとか無事に葉を茂らせ、ぎんなんも実りました。そんなふうの実のなる木が、オリーブや、みかん、かりんなどいくつかあります。一年を通して葉が出て、つぼみがつき、花が咲き、そして実が実る。それに気付いたり、気付かなかったりもしますが、そこで生命たちは静かに、ささやかに営みを続け、子どもたちと共に同じ空間、同じ時間を生きています。時にそんな営みに気づき、それを見つけ感じられる喜びが身近にあることはとても幸せだったりします。今年も幼稚園の南門にあるビワの木に実がたくさん実りました。寒い冬に白い花を咲かせ、実をつけ、静かにその実を大きく成長させてきたビワの木、その下を通るたびにその成長を見守り、いつか自分達が味わえることを楽しみにしてきました。どの学年も今年も味わうことが出来たのですが、これからもっと甘くなるそういう時にカラスたちがその実をねらい、つついているのです。つつかれ落ちた実を残念そうに見つめる子どもたち、でもそんななか味わった実は少しま

だすっばい段階であっても格別な味になってしまったりします。自分たちが見守ってきた一粒一粒なのですから。どこにあるビワよりも、みんなで味わえるその一粒が最高になってしまう、これ以上ないという幸せそうな顔をして食べる子どもたちを見ると、そんな時間が与えられていることに心から感謝せずにはいられません。食べた後に残るビワの種、それを大事そうにポケットにいれる子どもたち、もしかしたらそこからまた新たな生命が生まれ、そして新たな物語が始まるのかもしれない。みんなが味わっているビワの木も、卒

園して今は大学2年生になる男の子が食べたビワの種が家で芽を出したというのが始まりだったりするのですから。

子どもたちの生活のいろんな部分があるほんの小さな出来事から始まって、それが繋がって広がり、守られていることを心にとめながらこれからも過ごしたい、そう祈る毎日です。

(石堂 寛子)

すずや便り

こんにちは。6月に入ってやっと気温も高くなり、過ごしやすい陽気が続いています。

先日、朝からベランダでバラの枝の整理をしていると「昨日、取引先から木を蒸した汁をもらってね。新製品なんだって。」と、後ろから夫の声がかかりました。

「木を蒸した汁??」「植物の消毒にいいらしいよ」「木酢液とか、そういう感じかな」

「そう、木酢液って書いてあった。なんで知ってるの?」

いえいえ、木酢液はずいぶん前から知っていますが使いこなす自信がなく、我が家では導入していないだけです。それにしても生き物系には

全く興味のない人だったのに、仕事からみとはいえ、横で何年もバラバラと騒いでいるのを見ていると「植物の消毒」というキーワードにひっかかってくれるようになるのですね。

長女が「嵐の二宮くん」は格好いいと騒ぎだしたのが2年前。ファンクラブに入り、いろいろと仕入れた知識を教えてくれるのでゲームが好きとか、細かいことまでこちらも覚えてしまいます。そうなるとう親近感が湧いてくるので、CMに「二ノ」が出ていても「あ、二ノだよ～」と反応するまでに。最近は活躍の場が多すぎてついて行くのが大変ですが「Monster」は、いい曲です。リー

ダーの歌が素敵

自分が好きなモノや人が成長していくのを見たり、応援したりするのはとても楽しいですよ。さらに身近な人の好きなことにも興味を持つと、応援する範囲はどんどん広がっていきます。ジャニーズだったり、漫画だったり、それは何？と思うことはたくさん。

そんな時に食わず嫌いをしないで誘われるままについていくと、いつの間にか自分の好きな分野に辿りつくことも。漫画は古典をモチーフにしていることが多いのでそれをきっかけにこちらの世界に入ってくれたときは格別です。そんなにきれいにハマることはめったにありませんが、自分のペースで好きなことをやっていると、不思議とリンクしてきます。リンクするように呟いてみたりもしますが、やっぱり下心はな

いほうがいいですね。熟成期間を経て「お、きた！」と思ったときに何がきっかけかを聞いてみると意外な答えが返ってくることもあり、そこから枝葉を広げていくともう無限の楽しみです。(ちょっと大げさ?) さて木酢液はいろいろな製法があるようですが、「木を蒸した汁」ではなさそうです。

何も知らない私にわかりやすく説明しようと思っての言葉(にしては分かりにくかった)だと思うので、ここはスルーしてぜひ試供品を試してみたいと思っています。

(富家 香麻里)

みかん便り

今年の夏は暑くなりそうですね。5月の終わりってこんなに暑かったですか? 愛媛は暑いですが、京都から愛媛に来てよかったです。あその夏はとても住めるような所じゃないんで。

5月、ゴールデンウィークが終わってから、いろいろ大変でした。恐怖でしたよ(笑)2010年はこれ以上しんどい事、怖い事、つらい事はないと思うので後はのんびり生きようと思いま

す。

でも、悪い事の後には良い事があるわけで、愛媛で知らない人はいない「坊ちゃん劇場」の舞台を見に行きました。坊ちゃん劇場は松山市から少し外れた郊外にある小さな劇場なんですけど、今「劇団四季」や「劇団わらび座」など、有名な劇団にかなり注目されてる劇団らしいです。ちょっとした事でこの支配人と仲良くなり、舞台『ミュージカル 正岡子規』に招 9

待してもらいました。歴史ものの喜劇です。正岡子規は何年も寝たきりの中、どうしてあのように多くの俳句を作れたのか。松尾芭蕉の足で感じ字に生かす俳句ではなく、視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚をフルに活用し、感じるままを写生した子規の俳句の数々を正岡子規の人生に沿って感じてきました。残り少ない命を精神力で補い、命の果てるまで懸命に生きていく子規の物語です。涙が流れるような悲しい部分もありますが、笑いに繋いでいくため涙は出ませんでした。いい舞台を見せてもらいました。たぶんこれは舞台を見ないとイメージも全然湧かないと思うので、内容はこれくらいにしときます(笑)

やっぱり舞台はいいですね。舞台上と客席の独特な一体感が病み付きです。役者とは違いますが僕も踊り子として12年間舞台で生きたんで、ミュージカルを見ながらも終始「いいなあ。あそこで踊ったら気持ちよさそうやのに。。」って考えてたぐらいですから。いつも舞台の上に立っていたので、観客として舞台を見るのも良いですね。

舞台上からお客さんの顔は照明の関係でよく見えないんですが、客席がノって来たときの空気は肌で感じます。どれだけ踊りの振りが完璧で群踊りの息が合っている、やっぱ

ないものなんです。最近ちょくちょく他のチームのダンスLIVEを見に行っていたんですが、あまりいい舞台はなかったです。お客さんをほったらかして、パフォーマーだけがテンション上がっていくマスターベーションの舞台は見てる側が恥ずかしいです。

で、この坊ちゃん劇場ですが、とてもいい舞台でした。初心者さんも安心して見れて、拍手も入れやすい。物語もいいですが、間にしろ、掛け合いにしろ、見てるお客さんに楽しんでもらえる舞台づくりが凝っていて嬉しかったです。参考になります。

今自分で作った「えるも」っていうダンスチームで活動してます。まだまだメンバーもいないし、踊りもまとまっていないし、衣装もない。活動しながらもめんどくさいことばかり起きてきますが、このミュージカルを見て、やる気が起きました。小さいステージでもまた舞台に立ちたいなあって本気で思いました。6月中には、まとまりのあるチームになるよう頑張っていこうと思います。やる気十分!!!

でわ

(河村 高志)

2010年6月 あんなこと こんなこと...

教会学校から

《5月の活動報告》

5月2日(日) 幼稚園の畑にでかけよう!

5月9日(日) “母の日” コンサート

5月16日(日) 津門川めぐり

5月23日(日) プラトンボを作って遊ぶ

5月30日(日) カルタ大会(石川啄木、県名カルタ他)

石川啄木カルタ、もったいないばあちゃんカルタをごちゃまぜにして二組に分かれての対抗戦を行いました。

《6月の活動予定》

6月6日(日) クリーン大作戦

6月13日(日) 花の日合同礼拝

6月20日(日) お父さんたちと一緒に遊ぼう

6月27日(日) 作って遊ぶ

大切な贈り物・津門川 9 3

“ 津門川しらべ ”

つとがわ 編集後記

2010年3月に130年の歴史を閉じることになった篠山市後川（しつかわ）の後川小学校の跡地を、西宮共同幼稚園の園外活動などに使わせてもらうことになりました。6月17日は、その最初の日となりました。行き帰りの移動（貸し切りバス）で約3時間、後川で過ごすのは約4時間です。畑作業などで、たまに出会う地区の人たちからは「西宮の幼稚園か？」と声をかけていただいたりします。小学校の隣の山田さんは、「子どもたちに！」と沢ガニを届けて下さって、帰りのバスの子どもたちに手を振って見送って下さいました。

閉校時に16人いた子どもたちは、4月からは市街地に近い統合された小学校にバスで通っています。地区の人たちの悲願で実現した、後川と市街地をつなぐトンネルですが、4月からは地区から出て市街地に近い小学校に、子どもたちが通うトンネルになっています。

昼間、地域の子どもの声が聞こえなくなった後川に、たまに西宮からやってくる子どもたちの声や姿が、嬉しいと地域の人たちはおっしゃって下さっています。と、おっしゃっていただくことを、少なからず複雑な思いでお聞きしながら、ゆっくりと時間をかけ、この“交流・つながり”が育っていくことを願っています。

(K)

先日、子どもたちと王子動物園へ行ってきました。そこで目撃したフラミンゴの赤ちゃんの誕生！卵の殻を割って出てきた瞬間に立ち会ったのです！一瞬、弱っているかのように見えただけ、親フラミンゴが嘴でつつくと動きだし！大歓声でした。フラミンゴ、また近いうちに会いに行かねば！です お近くの方はぜひ！

(I)

5月に誕生日を迎え、20代後半に突入しました。嬉しい様な、嬉しくないような複雑な心境です。でも、誕生日にはいろんな人からお祝いの言葉をかけてもらい、こうしてまた新しい1年を迎えられて幸せな気持ちになりました。1年に1度、誕生日だけにしかメールが来ない友人がいます。今年もメールを送ってくれました。1年に1度でも思い出してもらえる日があるって嬉しいです。支えて下さる周りの人たちに感謝の一日になりました。

(Y)

無性に本が読みたくなる時とほとんど読まない時があります。今は前者の方で～。ぶらぶらと本屋に行っておもしろそうなものを自分で見つけるときもあれば、周りの方にオススメしてもらっ

て出会う本もあります。

『センスオブワンダー』はその中の1冊です。読みながらこれまでの公同での日々が頭に浮かび、読み終るとなんだかとても新鮮な思いになりました。読んだ後、子どもたちと雨の日に散歩にでかけました。それまで少し憂鬱だった雨の日、雨音を聞いたり水溜まりを眺めたり テルテルボウズ～と口ずさんだり、紫陽花がいつもよりも美しく見えたり～子どもたちと過ごす雨の日にウキウキしました。そんな思いを抱かせてくれたこの1冊にそして子どもたちに感謝します。

さて～次は何を読もうかな

(N)

南アフリカでワールドカップサッカーが始まった。実は南アフリカはあまり「遠く」には感じられない。2001年夏、香港を経て30時間、ヨハネスブルグに飛び、1年に1ヶ月だけ春先に花が咲き誇る場所を案内されて10日間の旅をした。こんなところに来ることができるなんて、と当時しみじみと思ったものだった。花はいつどこでその年に咲くかわからない、でも訪れる先々満開という幸運に恵まれたが、多種の花の中、ガザニアの大輪には驚いたものだった。余談だけれど花が大きい分、なめくじの大きさも並みのものではなく～。

5月30日から1日まで船中泊一泊を入れて東京七島のひとつ三宅島へ。2000年の6月に噴火、全島避難を経て帰島、その後住む人は減りはしたもののただただ島を愛する人たちがそこで今日を生きておられる。家の玄関先に、学校で役場で、道すがら目に入るのがガザニア。現地では違う名前を言われていたが帰島の折に届けられ、植えられた花のひとつ。とにかく島に着いてからずっと目にしては気になり続けたのだけれど、南アフリカで寒く長い冬を経て輝くように咲く花畑を目にした時の感動を、三宅島の訪問でその思いを新たに。場所があれば必ず大輪をつける花だ。朝4時過ぎには火山灰ガスの状況のレベルが放送されていた三宅島、今日は？明日は？。音楽を届けるプロジェクトの演奏会が終わったあと、ピアノそして打楽器奏者のお二人に「すごかった」「びっくりした」とにこやかに伝えていた子どもたちの顔が思い出される。

(J)